



## C2021-10 人は何者であるか

### [今月の聖書]

#### 詩篇 37:23,24

37:23 人の歩みは主によって定められる。主はその行く道を喜ばれる。37:24 たといその人が倒れても、全く打ち伏せられることはない、主がその手を助けささえられるからである。

#### ヨハネ 3:16

神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

#### ローマ 8:31-34

8:31 それでは、これらの事について、なんと申すか。もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか。

8:32 ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあるか。8:33 だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである。

8:34 だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。

#### ヤコブ 1:17,18

1:17 あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父から下って来る。父には、変化とか回転の影とかいうものはない。

1:18 父は、わたしたちを、いわば被造物の初穂とするために、真理の言葉によって御旨のままに、生み出して下さったのである。

#### 2 コリント 5:17

5:17 だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。

お元気で過ごしてはいかがでしょうか。今月は、「人は何者であるか」と題して聖書が人間について何と語っているか耳を傾けてみましょう。再び1967年10月に、20歳の私が回心した時聞いたビリー・グラハム博士のメッセージが何であったかということを回想しています。

人間はどこから来て、なぜ今ここにいるのか。そしてどこに行くのか。そして生きている意味は何なのか。これらの問いは、誰もが持っている深い疑問なのです。しかし日々の忙しさや、時間に追われて、その答えを出さないまま歳をとり、一生を終えてしまいます。

パスカルは「パンセ」の中で「人間は考える葦に過ぎない。自然の中で最も弱いものであるが、それは考える葦である」と述べました。弱い植物の象徴である葦が考えることができるとするならば、それは信仰です。神を知ることです。また自分の罪を知ることであり、キリストの十字架の前に跪くことです。そして初めて人間は神によって作られた人になることができるのです。

20世紀は科学発展の世紀であったと言われますが、21世紀は科学の限界を知る世紀であると言われます。コロナ対策の難しさを見ても、医学の限界を知らされ、その解決を見る前に私たちの前に死が突きつけられているのです。

本当に私たちが生きている意味は何なのかと真剣に考えるべき時です。人間の有限性を認め、罪の赦しをいただき、神に立ち帰るべきです。聖書が語るこのメッセージに神の愛が表されています。そして神の愛はあなたの上にも注がれているのです。今月も神様の祝福をお祈りいたします。

(お知らせ)

10月から地区集会再開を願っておりましたが、現状を見る限り困難と思われまますので、もう少し休会といたします。皆様との再会を待ち望んで祈っております。

「わが信仰の系譜」 (1)

横塚 實 (神奈川県)

私は 1935 年(昭和 10 年) 10 月 17 日、神奈川県高座郡大沢村大島にて生まれました。父峯松は、栃木県の農家の次男であった為、転職を繰り返した後、早稲田大学専門部に於て土木工学を学び、横浜市水道局の上水道の現場で 40 年間務めました。大正 10 年(1921 年) キリスト教に接し、菅野鋭牧師を通し主イエスを信じ救いの道に入りました。



母タケは千葉県君津郡の米問屋の次女として生まれ、先に横浜に嫁いだ姉を頼って上京し、保母の仕事についていました。しかし精神的な満足を求めてつい大正 10 年キリスト教に接し、父と同じ日本ホーリネス教団横浜教会で主イエスを信じ救いを得ました。

昭和 16 年(1941 年)第二次世界大戦が勃発し文字通り戦争一色の時代を迎え、交通の不便な我が家から伊勢佐木町の教会に行くことができず、父を中心とした家庭集會が持たれましたが、父の聖書朗読や説教の後、家族全員の祈りが終了するまでは誰一人動くこともできず、6 歳の私にはあまりにも窮屈な環境でした。

横浜教会は昭和 20 年 3 月(1945 年)横浜大空襲により全焼いたしました。私が国民学校 3 年生の時でした。

戦後の教会は、昭和 24 年(1949 年)東洋宣教会からの資金援助を受け、横浜市西区南軽井沢に木造平屋建ての新会堂が完成しました。私が中学 3 年生の時でした。その後父が横浜市西谷浄水場に転勤して、私は高校生となり自転車を飛ばして、日曜日の礼拝に参加するようになりました。

昭和 29 年 4 月(1954 年)私は、関東学院大学工学部機械工学科に入学しました。聖日礼拝の後、夕刻 7 時 30 分より伝道集會に参加しましたが、その前に近隣の住宅街を回り、太鼓を叩き、タンバリンを鳴らして路傍伝道をしました。また同年輩の教会員とともに「ただ信ぜよ」(聖歌 424 番)を歌いながら、道行く人々にキリスト教の素晴らしさを語り、伝道集會に誘いました。思えば古き良き時代でもありました。

「恐れるなかれ、ただ信ぜよ」(マルコ 5: 36)



このように両親の熱心な指導と、尊敬する牧師や教会の先輩たちとの交わりの中で、またミッションスクールの学生としても、私はいつの間にか熱心なクリスチャンのような生活をしていました。いろいろな伝道者の説教を聞き、涙を流して悔い改め、恵みの座に出て祈ったこともたくさんありました。尾花牧師も私の心の変化を見ていたのでしょうか。横塚家の息子の一人としてではなく、一人の男として、これから社会人となる者として、信仰の決断をしなければならぬと思われたのでしよう。「今のままではだめです。自分の信仰を確立するために洗礼を受けませんか」と勧められました。私は心の準備もできていましたので、そのまま「お受けします」と、従ったのです。

昭和 33 年(1958 年) 4 月のイースターの午後、私の兄と他に 2 人の女性たちとともに、磯子海岸に入水して洗礼を受けました。まだ水が冷たい日でした。しかしそれは私の第二の人生の出発となりました。

同年 4 月、大学卒業と同時に、日産車体株式会社(日産自動車)に就職し、幼少の頃より興味を持っていた自動車の開発の仕事に従事することになります。

昭和 36 年 9 月(1961 年)、東京クリスチャンクルセードが開催され、聖歌隊員として参加しました。その大会を記念していただいた「勝利の生活」という本の中に、「主に思い出されることを求めるものよ、自ら休んではならない」(イザヤ 62: 6)と小原十三司牧師が書いてくださった御言葉は今日も私の宝物です。

かねてより、30 歳位をめどに結婚の願望を持っていましたので、両親にはクリスチャンの家庭で育ち、良い人がいたらとその旨を伝えていました。

昭和 40 年 8 月(1965 年)、澤野靖子とのお見合い話があり、主の導きとして感謝し、同年 10 月 15 日、横浜教会にて尾花牧師の司式により婚約式を、翌昭和 41 年 1 月 8 日(1966 年)結婚式を挙げ新家庭が誕生いたしました。お互いに交換した聖書に導かれる聖句を書きましたが、はからずも詩篇 23 篇であったことは神の導きであったと感じております。

「主に感謝せよ、主は恵み深く、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。」(詩篇 136: 1)